

【論文】

ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』における現実の発明
——日常、家族、デモクラシーの物語——

益 敏 郎

Die Erfindung der Wirklichkeit in *Hölderlin* von Peter Härtling
—Die Erzählung über Alltag, Familie und Demokratie—

Toshiro Eki

要旨 (Abstract)

In his biographical novel *Hölderlin*, Peter Härtling criticized the social conditions in postwar West Germany, the fifties' refusal to recall the history and the sixties' political radicalization, and, in opposition to the two images of Hölderlin, the metaphysical poet that had been maintained until the fifties and the political poet (homo politicus) of the sixties, he invented the "reality of Hölderlin" in the daily life. To do so, Härtling practices a method that breaks with the assumptions of biography and historical fiction, that of the self-referential narrator of subjectivity and fictionality, and produced important results in the exploration of the possibilities of the narrative. However, a strong attachment to motherhood and a problematic tendency to uncritically follow traditional views of the family should also be recognized. On the other hand, there are also important ideas that conceive of democracy on the basis of the intimate sphere.

キーワード (Keywords) : ペーター・ヘルトリング (Peter Härtling)、フリードリヒ・ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin)、伝記小説、歴史、物語、記憶、日常、家族、デモクラシー

はじめに

本稿は戦後西ドイツの作家ペーター・ヘルトリング (Peter Härtling, 1933-2017) の伝記的小説『ヘルダーリン (Hölderlin)』(1976年)の研究である。日本では翻訳の多くを占めている児童文学によって知られるヘルトリングだが、彼は歴史と物語、記憶の関係を問う作品を追求しつづけた作家でもあり、『ヘルダーリン』はそうした作品群における代表作である。

ヘルトリングについての評論および研究は早くから盛んであり、『ヘルダーリン』の研究に関しては、語りの内省、注釈、弁明を繰り返す解釈学的な振る舞い、またそれによって攪乱される現実と虚構の境界の問題などが主要な考察対象となってきた。¹これは物語の語り手の立場に、人間一

¹ Vgl. Michel, Willy: *Die Aktualität des Interpretierens*. Heidelberg (Quelle & Meyer) 1978; Fritsch, Hildegard: *Peter*

般が持つような限定を与え、歴史と物語、事実と虚構の関係を問いに付してきた20世紀文学の一角に、ヘルトリングを位置づける試みである。本稿でも、ヘルトリング文学のそうした側面を改めて確認することになるだろう。

しかし本稿がとくに注目するのは、ヘルトリングの『ヘルダーリン』が、1970年代の戦後西ドイツという歴史、社会状況において、明確な時代的意図をもって構想された点、そしてこのことが親密な空間におけるヘルダーリンを「発明する」という独特の結果に至った点である。これは20世紀以降、劇的な評価の転換を何度も経験するという特異な受容のされ方をしたヘルダーリンの言説史において、今なおユニークなものでありつづけている。なおヘルトリングが多く残した伝記的小説において、その芸術家イメージに着目する点は、近年のヘルトリング研究の傾向であり、そこでは疎外、孤独、分裂といった特徴の共通性などが研究されている。² それに対して本稿の特徴は、時代状況との関連や従来のヘルダーリン受容との差異を分析の切り口とすること、またそうすることで日常空間を父性と母性をめぐる構造として把握し、さらにこうした親密圏に立脚してはじめて可能となる政治性をヘルトリングが表現した可能性についても検討する点にある。

したがって本稿の構成は以下の通りである。第1章において、ヘルトリングが『ヘルダーリン』執筆時に抱いていた戦後西ドイツの社会状況への批判意識と、ヘルダーリンの受容史、解釈史を明らかにする。第2章では、具体的に『ヘルダーリン』を解釈し、その語りの特徴、親密圏における「父たち」「母たち」の意味、そしてそこから生まれるデモクラシーといったテーマを追求する。最終章では、本論での議論を総括するとともに、『ヘルダーリン』から10年ほど後に行われたフランクフルト詩学講義のテーマ「発見と発明」に触れ、親密圏を創造する物語の問題性について、批判的に考察する。

1 - 1. 『ヘルダーリン』執筆の背景

ヘルトリングの『ヘルダーリン』は、彼の代表作に数えられる作品である。1770年生まれの人フリードリヒ・ヘルダーリンの名をタイトルとするこの作品は、芸術家の生涯を調査し記述する伝記の形式を取りつつも、残されたテキストや資料からは失われた日常性を想像力によって補完するという独自のスタイルによって貫かれている。この「発明 (Erfinden) の詩学」とも言うべき方法論の実践は第2章で扱うとして、さしあたりここではヘルトリングの作品における『ヘルダーリン』の位置づけや、それが書かれた時代背景などを整理する。

実在の芸術家を対象とした伝記的小説という『ヘルダーリン』のスタイルは、ヘルトリングの創作の一つの中核をなしている。ヘルトリングに作家としての最初の成功をもたらした『ニーンブシュ (Niemsch)』(1964年) からして、1802年生まれの人オーストリアの詩人ニコラウス・レーナウを扱う作品だった。その後ヘルトリングは、ヘルダーリン (1976年)、エドゥアルト・メーリケ (1982年)、ヴィルヘルム・ヴァイプリング (1987年)、フランツ・シューベルト (1992年)、ローベルト・シューマン (1996年)、E・T・A・ホフマン (2003年)、ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル (2011年)、

Härtlings „Hölderlins“. *Untersuchung zur Struktur des Romans*. New York / Bern / Frankfurt am Main (Peter Lang) 1983.

² Ganczar, Maciej: *Romantische Künstlerfiguren in der Prosa von Peter Härtling*. Frankfurt am Main u. a. (Peter Lang) 2015.

ジョゼッペ・ヴェルディ（2015年）など、多くの芸術家を対象に、生涯にわたって伝記的小説の創作に取り組みつづけた。共通する特徴は、対象の時代が18世紀後半から19世紀前半、ロマン主義からビーダーマイアの時代にある程度まで限定されること、また詩人について言えば、ヘルトリングが青年時代を過ごしたヴェルテンベルク出身の詩人が主な対象となっている点である。作曲家、音楽評論家としても活動したホフマンを含め、次第に音楽家への関心が顕著になることも大きな特徴である。しかし『ヘルダーリン』がなおも重要な意義を失わないのは、この作品において芸術家へのアプローチの方法論、すなわち遠く過ぎ去った時代に属する芸術家たちの生を記述する方法、またそれを彼ら彼女らの作品とは別の経路を経て現在の地平にもたらず方法が確立されたからである。

ヘルトリングが『ヘルダーリン』を発表したのは、編集長も務めた老舗の出版社S・フィッシャー社を1974年に辞め、専業の作家になってまもなくのタイミングである。それゆえこの時期は、ヘルトリングの作家としてのキャリアの重要地点に当たっている。しかし出版時期の意味は、個人的な問題にのみ還元されるわけではない。過去と現在を想起や想像力によって結びつけようとするヘルトリングの文学は、彼が幼少期に経験した戦争の記憶、そして60年代から70年代にかけて顕在化した戦後西ドイツの抱える過去の問題という歴史のアポリアと深く結びついているからである。

1933年、ドイツのケムニッツに生まれたヘルトリングの戦争体験は、凄惨な喪失に彩られている。ナチスの支配や世界大戦の戦禍を逃れるべく、オーストリアやドイツの各地を転々とするなかで、ロシア軍の戦争捕虜となった父を亡くし、母はロシア兵に性的暴行を受け、翌年に自殺を遂げた。ヘルトリングはこうした過去の喪失体験に繰り返し目を向け、これを作品に昇華している。その方法論は、興味深いことに伝記的な芸術家小説とベクトルを同じくする。なぜならプライベートな想起の文学も、実在した芸術家への接近を試みる小説も、彼にとっては過ぎ去った時間、失われた物事を物語ることで、心理的かつ歴史的な空白を埋めようとする試みに他ならないからである。さらにこの過去を取り戻そうとする欲求は、社会的な問題とのつながりを有している。つまり1950年代までの戦後西ドイツ社会において、人々が歴史に向き合わず過去が誤魔化されてきたこと、とくに戦後に社会復帰した父親世代が、誠実な想起を避けつづけてきたことへの強い不信感、嫌悪感が、ヘルトリング文学の大きな動機となっているのである。

ヘルトリングは1978年のインタビューで、「50年代の、真実のない偽りの想起に対する反感」を吐露している。³そして学生運動が吹き荒れた1968年前後について、当時執筆中だった作品を引き合いに出し以下のように語っている。

この小説〔筆者注：『家族の祝い (Familienfest)』〕は1967、68年に書かれました。それは政治的前衛が歴史に対して、また「市民的記憶」に対して断固たる否をつきつけた時のことです。目指されたのは、1945年とは異なる条件下での、二度目の「ゼロ地点 (Nullpunkt)」から出発することでした。その理由は明白です。父親たちの世代が歴史を語り変え (umerzählt)、拒否してきたからです。ファシストの犯罪者、同調者が、慈善家、根っからの民主主義者に様変わりしたのです。⁴

³ Zit. aus: Michel, Willy: Poetische und hermeneutische Erinnerung. Ein Gespräch mit Peter Härtling. In: Ders., S. 197-204, hier S. 198.

⁴ Ebd.

ヘルトリングは1968年前後の政治運動に対し、少なくともその歴史的意義については肯定的な評価を下している。戦争を生き延びた彼の父親世代の多くが、自分たちの犯した罪に向き合うことなく戦後民主主義社会に順応していった点を、68年運動は批判したのであり、この点についてヘルトリングも意見を同じくしているからである。物語作家のヘルトリングからすれば、父親世代の行いは過去から現在への物語を偽造することであり、過去に対する恥ずべき裏切りである。それゆえヘルトリングが物語を通じて過去に向き合うのは、社会的な破壊や裏切りにさらされた過去とのつながりを回復しようとするためなのである。

ただしヘルトリングの文学は、政治的な動機に基づいて、正しい歴史、正統な物語を提示しようとするものではない。過剰な政治性には、あくまで慎重な態度を取る。いわゆる68年世代よりも一回り年長世代のヘルトリングは、60年代にギュンター・グラスが呼びかけたドイツ社会民主党（SPD）の選挙支援に協力するなど、一時は社会参加に積極的だった。ところが政治運動が盛り上がるにつれて、彼はむしろそこから距離を置くようになる。この点についてヘルトリングは、たとえ政治的理念に共鳴していたにせよ、自分は行動を起こす側に回ることはできないと悟り、同時にこのことがフランス革命に共鳴し革命運動家の友人とも交遊しながらも、あくまで詩的思索の世界に踏みとどまったヘルダーリンへの共感を深めたのだという。⁵つまりヘルトリングが『ヘルダーリン』を執筆する背景には、50年代の欺瞞的な保守化にも、60年代の過剰な政治化にも距離を取った70年代の彼の立場が存在するのである。

1 - 2. ヘルダーリン受容史とヘルトリングの批判的立場

ヘルトリングによるヘルダーリンの新しい物語が大きなインパクトを持ったのは、きわめて特徴的な歴史へのアプローチもさることながら、それがヘルダーリンをめぐって形成されてきた言説にとっても、すぐれてクリティカルな論点をはらんでいたからである。ヘルダーリンは歴史上、評価の大きな転換をいくども経験した詩人であり、宗教性の色濃い難解な作品を多く残したこともあってか、彼をロマン化するさまざまなイメージが膨大に生み出されてきた。そしてここには、20世紀以降のドイツの歴史の負荷がかかっている。ヘルトリングが新たに語ろうとするヘルダーリンは、このようなヘルダーリンの受容史、解釈史に対しても、その空白を埋めるものなのである。

ヘルダーリンは生前まともな評価を受けることのなかった詩人である。シラーやヘーゲル、シェリングらと交流関係を持ち、長編小説『ヒュペリオン (Hyperion)』(1797/99年)を出版するなどするも、詩人として日の目を見る前に精神的な病を悪化させ、1807年から36年間、のちに「ヘルダーリンの塔」と呼ばれることになるネッカー川ほとりのツインマー家で、長い余生を送ることになった。彼の「狂気」が真正な詩人の証として尊敬の対象となることは一部であったものの、その詩作への無理解は変わらなかった。彼の死後は、古代ギリシアを熱烈に愛した珍しいロマン派の一変種として評価されるのが関の山で、ほとんど忘れ去られた存在となっていった。

しかし20世紀の初頭、こうした状況が一変する。その直接的ないし物理的な要因は、遺稿を含むヘルダーリンのテキストが整理され、彼の作品を理解するための条件が整えられたことである。これは、

⁵ Ganczar, S. 42.

ヘルダーリンの死後から半世紀、彼が主要な作品を残した時期からすれば一世紀が経過したタイミングだった。そしてその結果、狂気の残骸とされてきた作品群に新しい光が当てられ、その詩的言語に時代をはるかに先駆ける可能性が認められるようになった。しかしこのあまりにセンセーショナルな「復活劇」は、ヘルダーリン崇拜とも言われる現象を引き起こした。ヘルダーリンの詩人イメージがある種インフレ状態に陥ることになったのである。たとえば歴史批判版全集を編集し、ヘルダーリン再評価の最大の立役者となったノルベルト・フォン・ヘリングラートは、ヘルダーリンが「神の言葉」を受け取った詩人であり、「祖国の精神」の代弁者、「ドイツの未来」を祝福する詩人だと絶賛している。⁶ ここに見られる愛国的なパトスには、当時のエリート層の危機意識が反映されている。すなわち産業構造の転換、台頭する大衆の存在、非人間的な規模にまで巨大化する戦争といった古き良きヨーロッパの没落とも見なすべき20世紀初めの状況に対して、エリート層が抱いた危機意識である。そこにおいて、ヘルダーリンをはじめとする過去の詩人たちが、危機に陥ったドイツを救済するメシア的な英雄として幻視される。この傾向はヴァイマル共和国時代を越えてナチス・ドイツ時代まで根強く残り、ヘルダーリンは純ドイツ的な愛国詩人として、政治利用の格好の対象となったのである。⁷

戦後の西ドイツにおいては、こうした政治利用は鳴りをひそめるも、ヘルダーリンのドイツ的英雄的イメージは、むしろ政治的破局によってゼロ地点に立ったドイツが立ち還るべき文化伝統として考えられ、根本的に見直されることはなかった。⁸ 政治性のみが脱色され、形而上学的、神話的な詩人のオーラは留まりつづけたのである。こうした状況が大きく変わるのが60年代末である。フランスのゲルマニスト、ピエール・ベルトーの研究、そして彼の挑発的な主張が引き起こした「ジャコバン派論争 (Jakobiner-Debatte)」がその火付け役である。

ベルトーのテーゼの要点は、ヘルダーリンを政治化することにある。彼はヘルダーリンがジャコバン派だったと主張する。これは、ヘルダーリンがフランス革命の原理的な信奉者であり、ドイツ国内の革命運動にも深く関与した革命詩人だったと主張することである。それに応じてヘルダーリンの作品を全て、来るべき革命の符牒として読む、という極端な政治化が施される。ここには明らかに、ヘルダーリンを形而上学的、神話的な詩人として捉えがちな戦後西ドイツの研究への挑発がある。それは、ヘルダーリン研究が戦前の政治利用に加担した歴史を自己批判することなく、依然としてヘル

⁶ Hellingrath, Friedrich Norbert von: *Hölderlin-Vermächtnis*. 2., vermehrte Auflage. Hrsg. von Ludwig von Pigenot. München (Verlag F. Bruckmann) 1944, S. 104f.

⁷ とくに1943年はヘルダーリンの死後100周年記念で、ドイツ各地で記念式典が開かれるなど、ナチス政権のプロパガンダに利用された。この時期のヘルダーリン受容については、以下を参照。Albert, Claudia: *Deutsche Klassiker im Nationalsozialismus: Schiller, Kleist, Hölderlin*. Stuttgart / Weimar (Verlag J. B. Metzler) 1994. またヘルダーリン受容全体の簡単な見取り図については、以下を参照。Wackwitz, Stephan: *Friedrich Hölderlin*. Zweite, überarbeitete und ergänzte Auflage, bearbeitet von Lioba Waleczek. Stuttgart / Weimar (Verlag J. B. Metzler) 1997, bes. S. 172ff.

⁸ 東ドイツにおけるヘルダーリン受容は、むしろ別個に考えなくてはならない。こうした東西ドイツのヘルダーリン受容については、以下の研究を参照。Packalén, Sture: *Zur Hölderlinbild in der Bundesrepublik und der DDR. Anhand ausgewählter Beispiele der produktiven Hölderlin-Rezeption*. Stockholm (Almqvist & Wiksell International) 1986. なおこの研究は、西ドイツのヘルダーリン受容の例として、ヘルトリングの『ヘルダーリン』にも言及している。その要点は、この作品が一般的な読者のヘルダーリンへの関心を高めたこと、また政治的に穏健化した70年代の空気を示していることであり、本稿と基本的な立場を共有する。

ダーリンを歴史的現実から引き離し、ドイツ風に審美化しつづけていることへの批判である。⁹

ベルトーはその後も、ヘルダーリンの狂気は政治的な迫害を逃れるための偽装だったという「仮病テーゼ」を提唱するなど、¹⁰ センセーショナルな研究を続けた。これらのテーゼは、多くの研究によって批判的に検証され、現在ではそのまま受け入れられることはない。しかしそのインパクトは大きく、マルクシストの左翼的ヘルダーリン受容の掘り起こしが行われ、ペーター・ヴァイスが戯曲『ヘルダーリン』（1970/71年）を生み出すきっかけを作り、さらに70年代以降の研究の流れを変えるほどのインパクトを持つことになった。¹¹ ペーター・ヘルトリングが『ヘルダーリン』を執筆する時点において言えることは、ベルトーの研究が、政治運動が吹き荒れた1960年代後半の政治状況と連動して、ヘルダーリンを政治的現実へ引き込もうとするものだったということであり、ヘルトリングは英雄化されたヘルダーリンだけでなく、この過剰に政治化されたヘルダーリンにも対峙せねばならなかったのである。

ヘルトリングは、『ヘルダーリン』を執筆するにあたって、上記のようなヘルダーリンの受容史、解釈史を調べ上げ、明確に批判的な態度を持つにいたったことを明かしている。

ヘルダーリンの場合、蓄積された過去の解釈の重みという障壁をどけてしまえば済むという話ではありませんでした。触れてはならない神聖な者、歴史なき者、時代を超えた者、ポエジーという素材だけでできた者という人物像を、文学研究は生み出していたのです。ここには文学研究という分野の歴史嫌いが反映されています。ヘルダーリンを据えた台座は高く、わたしにはどうにも越えられないように思えたものでした。おまけにイデオロギー的要素や硬直した教義がからみついており、いずれの立場も他の考えを受け入れません。祖国詩人、聖者、ギリシア人のヘルダーリンか、それともジャコバン派のヘルダーリンか。常にクリアで陰影というものがないのです。¹²

ここで言われる「祖国詩人、聖者、ギリシア人」というイメージは、明らかに60年代まで保守されてきたヘルダーリン像である。祖国詩人はナチス時代に政治利用の根拠となった愛国的なイメージ、聖者は近代が失ったものを取り戻す形而上学的なイメージ、ギリシア人は近代世界を厭い理想的な古代世界に遊ぶ純粹詩人というイメージ、といった具合である。それに対して、ヘルトリングは「ジャコバン派のヘルダーリン」という表現で、ベルトーのジャコバン派テーゼを示唆する。そしてこのようなベルトーの立場もまた、結局のところヘルダーリンを別の形で台座に上げて記念碑化するものだという。なぜなら非歴史的なヘルダーリンの対極に、純然たる政治的ヘルダーリンが鑄造されるにすぎないからである。ヘルトリングはこの二つの極のあいだに、語られないままになっているヘルダーリンを発見しようと試みるのである。

それゆえここには、ヘルトリングの戦後ドイツ社会に対する姿勢との並行関係を見出すことが可能である。50年代の歴史忌避、60年代の政治化に対して、第三の道を模索したヘルトリングは、ヘル

⁹ Vgl. Bertaux, Pierre: *Hölderlin und die Französische Revolution*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1969.

¹⁰ Vgl. Bertaux, Pierre: *Friedrich Hölderlin. Eine Biographie*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1978.

¹¹ Vgl. Beckermann, Thomas u. Canaris, Volker (Hrsg.): *Der andere Hölderlin. Materialien zum ›Hölderlin‹-Stück von Peter Weiss*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1972.

¹² Zit. aus: Michel, S. 204.

ダーリンの受容史もまた同様の構造的問題をはらんでいることを洞察した。そしてこの第三の道の先に、超歴史的なヘルダーリンでも政治的なヘルダーリンでもない新しいヘルダーリンを発見しようとしたのである。もちろんこの新しいヘルダーリンがいかなるものだったのかは、作品に沿ってより詳細に考察されねばならない。以下の章では『ヘルダーリン』を具体的に解釈し、ヘルトリングが提示したヘルダーリン像を、従来のそれとの差異を強調しながら明らかにしていく。

2 - 1. 『ヘルダーリン』の語りと日常性への「接近」

伝記的小説の『ヘルダーリン』は、ヘルダーリンの生涯に関する記述、量的には限定的ではあるものの彼の作品や手紙からの引用、それに加えてヘルダーリンとその周囲の人物たちが会話を繰り返す物語が織り成された構成となっている。伝記としては異例の物語パートについてはのちに詳しく見ていくが、目立った特徴として、章立てのなかに「最初の物語 (Die erste Geschichte)」(第1部第2章)、「第二物語 (Die zweite Geschichte)」(第1部第4章) という形で、計15を数える「物語 (Geschichte)」が組み込まれていることが挙げられる。実のところヘルトリングが挿入する「物語」はこれらの章に限らず至るところに見られるが、とりわけこれら15の章では、資料には残されることのなかった過去の場面が、小説さながらに展開される。

しかしこの作品そのものを、過去の出来事を物語化する歴史小説のようなものと同一視すべきではない。むしろヘルトリングは、歴史小説的な過去の再現のあり方に、批判的な考えを持っていた。その際にポイントとなるのは語り手の振る舞いである。ヘルトリングはこうした点について以下のように述べている。

小説の語り手は、注釈者の役割を引き受けることができます。現在のことに照らして過去のことを検証し(逆も然りです)、両者を区別し、両立不可能なものを描写する。そして時間を層として可視化し、それらの非同時性を読者にたえず意識させるのです。事実『ヘルダーリン』という小説は、読者の「善意」を前提とする単一的な視点の歴史小説への攻撃になっています。¹³

ヘルトリングが批判するのは、背後に隠れて読者を単一の歴史像に引き込むような語り、とりわけ読者を夢中にさせるべく現在と過去の区別をうやむやにする娯楽性の高い歴史小説の語りである。それとは逆に、小説の語りにおいて重要なのは、現在と過去の「非同時性」を浮き彫りにすること、「注釈」を行う存在として読者に異化効果を与える存在でありつづけることである。

ただしこの注釈する語り手は、客観的な判断基準を作品内に持ち込むわけでもなければ、読者へのより正確な事実の伝達を目的とするわけでもない。むしろ語りの主観性をその都度自己反省し、自らの語り結局のところフィクションに過ぎないということを繰り返し意識させる。歴史小説的に見れば、これは過去の世界に没入しようとする読者の意識に冷や水を浴びせることに他ならない。そして同時に、経験的な事実を基盤とすべき伝記のあり方からも逸脱することになる。語り手は「1770年3

¹³ Zit. aus: Michel, S. 199.

月20日、ヨハン・クリスティアン・フリードリヒ・ヘルダーリンはネッカー川ほとりのラウフェンに生まれた——」というあからさまに伝統的な伝記のスタイルで始めておいて、ただちに以下のように注釈を加える。これらをつなぐダッシュには、アイロニカルな含意すら読み取れるかもしれない。

——わたしが書くのは伝記ではない。それは一つの接近 (Annäherung) なのかもしれない。わたしは詩や手紙、散文作品、その他多くの証言から知っているにすぎない人物について書く。それは複数のイメージであって、そこに文章によって命を吹き込もうというのだ。わたしの記述においてはきつと別の人間ができあがるだろう。わたしは彼の考えたとおりに考えることなどできないのだから。せいぜい彼の考えを読み取ることができるだけだ。わたしは1770年に生まれた男が感じたことなど、正確には分からない。彼の感じたことはわたしにとってみれば文学だ。彼の時代のことなど、さまざまな資料から知識を得ているにすぎない。「彼の時代」というとき、わたしは歴史を書き写す (Geschichte abschreiben) か、一つの物語を書く (eine Geschichte [...] schreiben) ことを試みるか、いずれかしかないのだ。彼は何を経験したのだろうか。どのように反応したのだろうか。彼は、母は、妹や弟、友人たちはどんなことを話したのだろうか。力を込めて書かれたものの背後にあるディオティーマとの一日は、どのように見えただろう。わたしは現実突き当たるよう努める。それが彼の現実というよりわたしの現実だということは承知の上だ。わたしができることといえば、語り伝えられてきた思い出の数々とわたしの記憶をつなぎ合わせることで、彼を発見する (finden)、いや発明する (erfinden) ことでしかない。いろんな形で伝えられたものを関連づけるが、それはわたしが作り出すものなのだ。彼の生は、詩作や資料のなかに記録されている。彼がどのように呼吸をしたのかは、分からない。それを想像しなければならない——¹⁴

こうした注釈の後、再びダッシュを置き、伝記的記述が再開される。「——生家はかつて修道院だった屋敷である」。一人称の語り手 (Ich-Erzähler) が登場しない、あるいは透明化された伝記の記述に対して、語り手はこの記述の背後には常に自分があるのだと宣言するかのごとく、前面に現れて「わたし」の立場を開陳していく。「わたしの記述」は、ヘルダーリンの現実というよりは「わたしの現実」を再現するのであり、「わたしの記憶」と結びついた創作物、発明品にすぎないことを強調するのである。

このようなコメントは、作品全体を貫いていくどとなく行われる。たとえば、ヘルダーリンが初恋の相手ルイーゼ・ナストとの逢引きを友人に取り持つよう頼んだ場面を描写した直後に、「これは作り話である (Das ist erfunden)。話しているのは一方〔筆者注：ヘルダーリン〕だけだ。相手は黙っているの、わたしにとっては話を作るのがいつもより楽だ (Erfindung leichter)」¹⁵ と介入する。ここにはユーモラスな雰囲気すらただよう。またヘルダーリンの友人イマヌエル・ナストとその親族の会話を描いたあとに、「こうした会話は創作である (Solche Gespräche sind erfunden)。しかしこれは人

¹⁴ Härtling, Peter: *Hölderlin. Ein Roman*. Köln (Kiepenheuer & Witsch) 1997, S. 11. なお引用箇所はすべて筆者による拙訳であるが、以下の邦訳を参考にした。ペーター・ヘルトリック『ヘルダーリン ある小説』富田佐保子訳、鳥影社、2021年。

¹⁵ Ebd., S. 94.

物たちをいきいきと色彩豊かにするための虚構ではなく、形式的なやりとりで伝統的な行動様式を記録しておくための虚構である」¹⁶とコメントする。これは小説などに出てくる一見無意味なやりとりを提示しておいてその意味するところを自ら解説するという、いささか諧謔的かつメタ的な振る舞いである。

ヘルトリングの作品の語り手は、このようにしばしば主観性、虚構性をめぐる自己言及を行い、歴史と物語、事実と虚構、現実と記憶の境界が曖昧な領域に読者を引き込む。こうした特徴ゆえにヘルトリングは、実証主義の歴史学や自然科学が前提とする中立的、客観的な記述の審級を問いに付し、語りの主観性、非一貫性、不安定性、疑わしさ、視野の狭さのなかに文学的可能性を開拓した20世紀の小説とともに論じられてきた。たとえば、読者を考察や分析、解釈に引き込むトーマス・マンの『ファウストゥス博士』(1947年)の一人称の語り、¹⁷またインゲボルク・バッハマンの『マリナー』(1971年)、ペーター・ハントケの『長い別れに寄せる短い手紙』(1972年)の語りを持つ解釈学的態度などである。¹⁸ ヘルトリングの『ヘルダーリン』が、こうした流れのなかで重要な一角を占める作品だということは、ここでも改めて確認しておきたい。

ただし、ヘルトリングが実験文学的な享楽に身を委ねているかという点、そのようなことは全くない。別のヘルダーリンを発明すると言っても、現実には決してありえなかったあからさまなフィクションを創造するわけではないし、語り手が現実と虚構の深刻な決定不可能性に混乱したり分裂したりするようなことも、語り手が時空を超えてヘルダーリンに話しかけるようなこともない。『ヘルダーリン』の語り手は、ありのままのヘルダーリンに「接近(Annäherung)」したいというひたむきな思慕の念に駆られている。この「接近」の目的地は、それがたとえ到達不可能な目標にすぎないとしても、「ヘルダーリンの現実」である。それが「わたしの現実」という代替物で満足せざるをえないのは、時代の隔たりや資料の不足のためであって、そこに認識論的な到達不可能性や言語的な表現不可能性といった問題系は存在しない。「ヘルダーリンの現実」は懐疑の対象ではなく、むしろ熱烈な憧れの対象なのである。

『ヘルダーリン』の語り手は、執筆を重ねている自らの「1975年7月28日」に言及しながら、過ぎ去っていくありふれた日常が与える感情の揺らぎに思いを馳せる。そして「だがわたしが彼の日々について書くとなると、まさにこうしたことを、それが過ぎ去ったことだからといって省いてしまうのではないか」と自問した後、以下のように続ける。

たとえば彼が進級を控えた友人と、大公に見放された彼の父親について話したこと、この二人がなかば冗談、なかば真剣に、くたばれ権力者と言おうとしたのに廊下の足音を聞いて黙ってしまったこと、クロップシュトックの詩が頭に浮かんだこと、修道院の寝室や居間に案内されている間、ニュルティンゲンの部屋や母の奇妙な癖を思い出していたこと。彼女はヘルダーリンの部屋の敷居をまたぐとき、いつも右肩で何かを押しやるようにして入ってきた。抵抗に合うのを恐れるかのように。

わたしはこのような、消えてしまった現実に迫ろうとするのだ。¹⁹

¹⁶ Ebd., S. 97.

¹⁷ Vgl. Fritsch, S. 11.

¹⁸ Vgl. Michel, S. 142-175.

¹⁹ Härtling (1997) S. 85f.

このように、「現実 (Wirklichkeit)」という言葉には、重要な意味的限定がある。それはとりもなおさず、家族や友人などとの日常であり、親密な空間で行われる会話やふれ合いのことである。それゆえヘルトリングが「わたしの (mein)」という所有冠詞を用いるとき、それは主観性によって制約されたという意味だけではなく、対象に対する親密な愛着的感情が込められているのである。

従来のヘルダーリン・イメージとの差異に着目した場合、ヘルトリングの『ヘルダーリン』が決定的に新しいのは、英雄でも政治人 (homo politicus) でもない、きわめて日常的な、親密圏のヘルダーリンを創造したことにある。そして歴史小説や伝記に対する批判的な差異もこの点にある。なぜなら、血湧き肉躍るエピソードで人物を英雄化する歴史小説や、作品のフィルターを通して人生を眺め、対象の人物を神話的なものに仕立てる芸術家の伝記がともに無視してしまうのは、まさにこの他愛のない日常的な空間だからである。

2-2. 「父の不在」論 (ラプランシュ) の回避

日常性にフォーカスを当てるヘルトリングの物語は、従来のヘルダーリンをめぐる言説ではつねに中心的な役割を演じ、彼の詩的、精神的世界の要だとされてきた「父たち」——幼い時分に亡くした二人の父、シラーやゲーテという偉大な年長者、そしてもちろん古代ギリシアやキリスト教の神々——を隅に追いやる。その代わりに、詩や政治の問題を語り合った友人たち、家庭教師で生計を立てていたヘルダーリンが最も日常的に接していたはずの女性たちが、物語の主要な場所を占めるようになる。

ヘルダーリンの作品と生涯を、病理学の観点から研究し、「父 (Vater)」の重要性、それも「不在の父」の重要性を指摘したのが、精神分析理論家としても著名なジャン・ラプランシュである。ラプランシュによれば、ヘルダーリンの統合失調症は、彼の詩的な創造性と不可分のものとして考えねばならない。そしてその特徴として、自分を庇護する父権的存在を強く求めながら、それを恐れ遠ざけようとするアンビヴァレントな感情的傾向があり、その中心にある「父の場所」は常に空所、否定性の場所になっているという。²⁰ ヘルダーリンの精神的な父でもあり、彼が作品を発表する文芸誌の責任者や、家庭教師の職の紹介などを行い実質的な庇護者になった存在に、フリードリヒ・シラーがいる。しかしシラーの存在は、空所を埋めてヘルダーリンに安定をもたらすのではなく、むしろその不在を求める力を強化する。そしてこの原理は、ヘルダーリンの詩作にも作用する。神とのつながりを熱狂的に求めながら、神々の去った世界、幻滅の近代世界に、見た目とは裏腹にむしろこだわり続けるのである。

このラプランシュの「父の不在」テーゼは、ヘルダーリンの詩作と生涯、そしてその病を理解する有効な図式と考えられてきた。²¹ ヘルトリングのヘルダーリンは、まさにこの「父の不在」的ヘルダーリンを回避する。確かにヘルトリングは、作品の最初の章を「二人の父」から始め、ここでは二

²⁰ Laplanche, Jean: *Hölderlin und die Suche nach dem Vater*. Stuttgart-Bad Cannstatt (Friedrich Frommann Verlag) 1975, S. 148.

²¹ ただし不在の神が絶対化し、ヘルダーリンの詩の詩学的、技巧的な側面や、思想的な可能性が無視される傾向を生むとの批判もある。Vgl. Kocziszky, Eva: *Mythenfiguren in Hölderlins Spätwerk*. Würzburg (Königshausen & Neumann) 1997, S. 9.

人の父の影響の大きさが語られる。しかし彼らは、詩という「母たちを求める必要のほとんどない二つ目の祖国 (Vaterländer)」²²へと精神化される。実の母は一人しか持たなかったヘルダーリンに「母たち」という表現は一見奇妙だが、のちにヘルダーリンの生涯を支え庇護することになる女性たちを含むがゆえの表現だろう。ここで重要なのは、ヘルトリングが父なる存在を詩の世界に、母なる存在を日常世界にそれぞれ位置づけていることである。それゆえヘルトリングの物語では「父たち」よりもむしろ「母たち」が問題となるのである。

ヘルトリングは、ヘルダーリンの通うマウルブロン修道院附属学校 (Klosterschule) にヴェルテンブルク公夫妻が訪れたとき、彼が妃のフランツィスカに詩を献呈したというエピソードに目を向ける。ヘルダーリンが16歳の時のことである。この大公はシラーを迫害したことで悪名高いカール・オイゲンであり、シラーを尊敬しフランス革命にも共鳴するヘルダーリンにとって「都合の悪い」逸話だからか、伝記でもあまり言及されることはない。ヘルトリングはこの場面を、日常のコミカルな一コマとして再現する。

わたしは彼〔ヘルダーリン〕を英雄扱いするつもりはないが、それでも彼は特別である。だからこそわたしは、彼の日常にとりわけ心を砕くのだ。
彼はルイーゼと初めてしゃべって、それからほぼ一ヶ月会えないことが分かって悩んでいたが、今はもう別のことに関心に移っている。大公殿下夫妻が修道院学校を視察することになったからだ。ヴァインラントは彼を呼び、「なんたる荣誉！ なんたる荣誉！」と鼻息が荒い。いま大公夫妻はハイデルベルクにご滞在中だが、授業を視察し諸々点検するべくご来校とのお達しだ。そのためにしなければならんことが山積みだが、詩人の君が大公妃殿下に捧げる詩を書き、礼節をつくして妃殿下にお渡しする役に選ばれたのだ。名誉だよ、ヘルダーリン君、名誉だ。11月8日までに残された日は少ない。励みたまえ。君は我が校の名声を高めてくれるだろう。最近では面倒ごとや警告沙汰が多い。たるんだ規律やふざけた演劇のせいだ。もう禁止されたがな。見てくれはよくしておかねば、分かったか？ (hasch verstande?) という言葉など彼はまったく聞いておらず、すでに詩のことを考え、「まことにありがたきマウルブロン修道院附属学校へのご来校、ヴェルテンベルクのフランツィスカ大公妃殿下、深き恭順たる忠誠を示し、大公妃のいと高き慈悲と慈愛に身を委ねたく願うヨハン・クリスティアン・ヘルダーリンであります」と詩の冒頭の恭順の意を示す文章を練る。彼は発育の良い寮生を演じ、追従家たちの列に加わり、金の表紙で包んだ自作の詩を妃殿下に献呈する。「心に秘めていた熱い願いは、長く／この若輩の願い、長く！」
わたしはこんな彼は好きではない。²³

教師の発言はシュヴァーベン方言の交じる自由間接話法で畳み掛けられ、ヘルダーリンと権力者との出会いの印象を和らげる効果を生む。そしてヘルダーリンの詩について語り手は、これを黙殺する

²² Härtling (1997), S. 34. この「祖国 (Vaterländer)」という表現は、ヘルダーリンの後期詩がしばしば祖国の歌 (vaterländische Gesänge) と呼ばれることも想起させるが、詩の側に「父 (Vater)」の要素を割り当てようとするヘルトリングの意図を読み取ることも可能だと思われる。

²³ Ebd., S. 108.

のでもなく、深読みするのでもなく、²⁴ 自分は「好きではない」と表明するという独特な振る舞いによって、ヘルダーリンの保守的な側面の存在を認めつつ、関心が別のところにあることを強調する。つまり、権威たる「父」に恭順の意を示すヘルダーリンの性格は詩作の側に還元され、語り手はその「英雄」的な側面を否定はしないものの、「日常」の方に関心を向けるのである。

「父」の問題においてとくに重要なのは、「ヴァイマルとイエーナの巨人たち」(第3部第5章)である。この「巨人たち」には、当時イエーナ大学で自らの哲学を精力的に展開していたフィヒテも含まれる。実際ヘルダーリンは彼の講義に通い、そのエネルギーに魅了されていた。しかしここでは、「父」としてより重要な存在感を持った別の「巨人たち」、すなわちゲーテ、シラーに注目したい。²⁵ シラーがゲーテとヘルダーリンを引き合わせた際に、ヘルダーリンは名前を聞き漏らし、相手がゲーテだと気づかずぞんざいに扱ってしまったという比較的よく知られた出来事について、語り手は以下のように注釈を加える。

このひょっとすると彼の人生を変えることになったかもしれない関係をぶち壊してしまった滑稽なエピソードのおかげで、このヴァイマル人〔ゲーテ〕をわたしの物語に受け入れる必要がなくなった。たしかにゲーテに語らせてもよさそうな引用は簡単に見つかるだろう。だが我を忘れた状態 (Entrückung) や荘重さ (Gravität) は、ヘルダーリンの物語にふさわしくない。ゲーテは、ヘルダーリンの希望に反して脇役にとどまる。ヘルダーリンはこの客人〔ゲーテ〕を本能的に無視した、心の中の何かが、彼を圧倒してくるものに抵抗した、ということもありうるのではないか?²⁶

留意しておきたいのが、「わたしの物語」に不適格だとされた「我を忘れた状態」や「荘重さ」が、むしろヘルダーリンの特徴として言及される典型例だということである。「父」との関係をめぐる、ヘルダーリンの精神は冷静さを失い、悲壮な重みを持つ。こうした関係をもたらす「巨人たち」を脇役にする事で、「わたしの物語」におけるヘルダーリンは日常性の親密な空間にとどめ置かれるのである。

すでに述べた通り、「父」としてもっとも巨大な存在感を持っていたのはシラーだった。詩人としてはヘルダーリンの先達者であり、経済的な面でも彼の庇護者となっていたからである。そのシラーとの関係で必ず問題となるのは、1795年の春頃、ヘルダーリンが何の前触れもなく突如としてイエーナから立ち去った出来事である。当時ヘルダーリンはイエーナでシラーとの交流を重ねながら、小説『ヒュペリオン』やその他の詩、翻訳などの執筆に取り組んでいた。そのさなかでの不可解で突発的な振る舞いは、その後の抑鬱的な様子などによって、およそ10年後に重篤化する病の前兆とも見

²⁴ 詩句の端々に権力者への批判が埋め込まれていると「深読み」し、ヘルダーリンの生涯と一貫性を保とうとする試みは以下を参照。手塚富雄『著作集第1巻 ヘルダーリン 上』中央公論社、1980年、87-96頁。

²⁵ 研究史的に言えば、1970、80年代からヘルダーリンに関する哲学的な研究が飛躍的に充実するようになる。その際とりわけフォーカスされたのが、ヘルダーリンのフィヒテ批判だった。むろんヘルトリングの小説には、このような成果は取り込まれていない。なおもっとも代表的なのは、ヘンリッヒの以下の研究である。Henrich, Dieter: *Der Grund im Bewußtsein. Untersuchungen zu Hölderlins Denken (1794-1795)*. Stuttgart (Klett-Cotta) 1992.

²⁶ Härtling (1997), S. 316.

なされる。²⁷しかしこのような出来事を語る際に、ヘルトリングの物語はヘルダーリンの親友イザーク・フォン・ジnkレアとの会話と別れの場面を演出する。そうすることで、ヘルダーリンの「逃亡」は、衝動的な病的振る舞いから、静かな決意を秘めた行為へと作り変えられることになる。

行くのか？ 引っ越すつもりか？
ニュルティンゲンに行って、家庭教師の職を探す。
考え直せよ。
ここ数週間ずっと悩んでいたんだ。
どうして何も言わなかった？
どうしたって出ていくしかないんだ。
シラーは知っているのか？
彼には手紙を書くよ。
逃げるっていうことなんだな？
その通りだ。僕は逃げる。
でも僕から逃げるわけではないだろう。
そうとも。

[…]

二人はよくやるように徹夜で語り明かすつもりだったが、ジnkレアはすぐに眠り込んでしまった。ヘルダーリンはそっと荷造りをした。服を紐でしばり、友を起こさないように家を出た。彼なら分かってくれるだろう。
シラーの家の前で彼は立ち止まった。窓は暗かったが、声を聞いた気がした。
彼はしばらく耳をすませ、それから先へ進んだ。²⁸

このように、ヘルダーリンが冷静に決断へと至る失われた情景を再現することで、英雄、予言者など種々の詩人イメージの源泉となってきた「父の不在」論を回避し、友人たちに支えられながら人生を歩むヘルダーリンが生み出されるのである。

2-3. 女性たち、あるいは親密圏からのデモクラシー

『ヘルダーリン』において重要な役割を果たすのが、前節でも言及した「母たち」、すなわちヘルダーリンと出会い、彼の日常を支えた女性たちである。一般的に、詩人としてのヘルダーリンをめぐる言説で言及される女性は、作品内に登場する理想化された詩人のミューズである。このような女性たちについては以下のように語られる。

ヒュペーリオンの最初の習作におけるメリーテが、ディオティーマとなる。ディオティーマ

²⁷ ラプランシュも統合失調症の顕在化をこの出来事に見ている。Laplanche, S. 66f.

²⁸ Härtling (1997), S. 337.

はシュテラやリュウダに続く存在であり、またしても理想化され、崇拜して遠ざけられた (entrückt) 人物である。ただし行動する存在として英雄の側に割り当てられ、こうしてすでに英雄と結びついている。愛する女性であり、破壊しえないように見える子供時代を、人間を受け入れるまっさらな自然を司る女性である。²⁹

シュテラ、リュウダ、メリーテは、有名なディオティーマと同じく作品内に登場する詩的形象である。それは「理想化され、崇拜して遠ざけられた人物」と呼ばれる。この「遠ざけられた (entrückt)」という語が、ゲーテとのくんだりでも用いられた「我を忘れた状態 (Entrückung)」と同類の語であることを見逃してはならない。ディオティーマをはじめとする詩人のミューズたちも、ゲーテやシラーと同様に「英雄」の側に位置づけられるのであり、したがってこの物語では脇役に甘んじることになるのである。

ディオティーマとは、もともとプラトンの『饗宴』でソクラテスにエロスの本義を伝える女性祭司の名であるが、ヘルダーリンのディオティーマは、フランクフルトの家庭教師先の屋敷で出会ったズゼット・ゴンタルトによって生まれた形象である。ヘルダーリンとズゼットの関係は言わば不倫関係に他ならず、スキャンダルめいた扱いを受けたこともあったが、その実態は詩に負けず劣らずプラトニックなものだったとされることが多い。しかしこの物語では、こうした伝説がまっこうから否定される。ズゼットとの出会いを友人に伝えるヘルダーリンの手紙を引用したあと、以下のようなコメントが挿入される。

文章による様式化 (Stilisierung) が、シンプルな感情や願いを弾いてしまう。まるでもうすでに逃げていて、決して近づこうとする気がないかのように見える。祭壇はあまりに高い。欲望も、エロティックな言い回しもない。肌も温もりもない。三年にわたってプラトニックな関係続ける理想的カップル。枯れ果てた文献学者の夢の充足。

そんなわけではない。そうではなかったのだ。彼らはおそらく最初の年にもう Du で呼び合っていた。破局までに起きたことは、考え出して物語らねばならない。それは逃亡の物語かもしれない。罰当たりな、それでも嬉しい緊張の物語。不安と忘我を分かち合う物語。³⁰

プラトニックな関係への信仰は、「枯れ果てた文献学者の夢」だと一蹴される。残された手紙は、「文章による様式化」が施されているがゆえに、字義通り理解してはならないという。当時はルソーの『新エロイズ』やゲーテの『若きヴェルターの悩み』など書簡体小説の最盛期であり、新しい恋愛の形への憧れが広がり、手紙が格好の自己様式化のツールとなっていたことを踏まえれば、これは的確な批判であろう。しかし物語はもっとも秘められた領域を大胆に創作する。この引用には、二人がヴィルヘルム・ハインゼの『アルディンジェロ』について語り合いながら、親密な、非プラトニックな逢瀬を楽しむ「第九物語」が続くのである。

しかしこの作品において、さらに重要な女性たちがいる。それは「母たち」とも言われたヘルダー

²⁹ Ebd., S. 371.

³⁰ Ebd., S. 381f.

リンを庇護する女性たちである。

ジンクレアはいつもと同じく熱烈に、家全部を宿として使ってくれと申し出て、母親にヘルダーリンのことを一番大切な友人だと紹介した。ヘルダーリンは彼女を見て、ギリシャ人であるノイファーの母親を思い出した（このような女性たちが、彼を受け入れ、庇護し、ヨハンナ〔ヘルダーリンの母〕が始めたことを当然のように引き継いでいく。まるでヨハンナから委託されたかのように）、彼女はコーヒーを勧めたが、ジンクレアはワインにしてくれという。再会を祝して飲むからね、ユングとロイトヴァインにも伝えなくては。³¹

むろんこうした女性たちは、他の言説においてほとんど言及されることはない。それゆえヘルトリングの物語は、ヘルダーリンを受け入れる「母たち」が、歴史の闇からすくい上げられる物語にもなっている。

ヘルトリングが採用する図式は、歴史に書き記される者、英雄、詩的、形而上学的世界、男性たちに対して、歴史から消えていく者、親近者、日常的世界、女性たちという、古代ギリシアのアンティゴネー悲劇から繰返されてきたありきたりな二分法だという側面は否めない。この点についてはヘルトリング文学において批判的に認識されるべき点であるように思われる。ただしこの『ヘルダーリン』においては、こうした図式をわずかながら揺るがすような思考の可能性も読み取ることができる。

それは、パリに滞在しフランス革命の惨状を目の当たりにした友人ヨハン・ゴットフリート・エーベルについて、ヘルダーリンとズゼッテが議論する個所である。「思想と表象様式の来るべき革命」と、ドイツが果たすべき使命についてヘルダーリンの書いたエーベル宛の手紙を引用したあと、語り手は以下のような注釈を加える。

（わたしがこれほど詳しく引用したのは、これらの文章が、彼を詩的なもの、純粹に精神的なものなかへ遠ざけてしまおうとする者たちへの返答になるからである。彼は政治的感覚をもつ人間、それも断固たる民主主義者（ein radikaler Demokrat）だった。彼がジャコバン派だったのか、ジロンド派だったのか、争ってみても意味はない。彼が行為する者たちに幻滅していたことは間違いない。[...]行為する者たちは生涯彼に不安を与えつづけたが、同じ程度に彼を魅了した。彼は思考のために行為者を必要とした。だがその思考は彼らを当てにすることはなかった。エーベル宛の手紙は、後世の者にも向けられている）

ズゼッテは彼の誇張した表現を理解しようとはしなかった。わたしたちに多くを求めすぎてる、ヘルダー、わたしたちはもっとちっぽけで取るに足らないの。でもエーベルにはあなたの励ましが必要ね。³²

ここでもズゼッテには、性急な政治的世界を嫌って穏やかな日常を守ろうとする役割が与えられている。とはいえ、形而上学的な愛の議論でのみ言及されるズゼッテを、政治的な話題に巻き込んで

³¹ Ebd., S. 361.

³² Ebd., S. 405f.

いることの批判性もまた認められるべきだろう。さらに注目すべきは、ヘルダーリンを非政治化する態度にも、ジャコバン派論争のような党派性を争う態度にも与しないと主張する際、ヘルダーリンを「断固たる民主主義者」と呼ぶ点である。ヘルダーリンが民主主義者を自認していたことを示すテキストは残されておらず、プラトンを好み、後年ホンブルク方伯に献呈する詩も残しているヘルダーリンが、留保なく民主主義を肯定していたかどうかは、当然ながら議論の余地がある。むしろこの「民主主義者」という語は、ヘルトリングの時代感覚から選ばれた言葉であると読むべきだろう。70年代のヘルトリングが、政治的領域から身を引きながら思考を続けたヘルダーリンに共感を抱いていたこと、また歴史忌避にも過度な政治化にも至らない方向を模索していたことは、すでに確認した通りである。そこで失われた親密な空間の現実を追い求めたヘルトリングは、ここから社会へとつながる回路を、この民主主義者という語に込めたのではないか。つまり『ヘルダーリン』において創作された現実には、空虚な理想やイデオロギーを振りかざす政治性を批判しつつ、単に非政治的な空間に引きこもろうとするのではなく、日常に根ざし、生活的内実をともなうデモクラシーの場所としても描き出されているのである。

結びに代えて——ヘルトリングの「発明の詩学」

『ヘルダーリン』を執筆していた時期のヘルトリングは、50年代の歴史忌避、60年代の政治的急進化に対して、別の新しい道を模索していた。そしてこの批判意識は、ヘルダーリン受容史、解釈史に対しても有効だった。それはヘルダーリンをめぐる言説において、50年代まで維持されてきた形而上学的な詩人像、60年代末に現れた政治的詩人像の批判にも直結するからである。このような問題意識のなかで、ヘルトリングは主観性、虚構性に自己言及する語り手という、伝記や歴史小説の前提を打ち破る方法を実践した。しかしより重要なのは、この語りを通じて創作される親密な空間、他愛のない日常としての「ヘルダーリンの現実」である。なぜならここにこそ、伝記や歴史小説が抹消してしまう、英雄でも政治人でもないヘルダーリンが創造されるからである。ヘルトリングはこれを、ヘルダーリンの物語から「父」的要素を排除し、ヘルダーリンと日常的に触れ合っていた友人や女性たちを物語の中心に据えることで実践した。

ヘルトリングは『ヘルダーリン』の執筆から約10年後の1984年、フランクフルト詩学講義において「発見と発明 (Finden und Erfinden)」に関する詩学を披露している。ただしこれは詩学といいつつも、写真家ロバート・キャパと彼の有名な写真「崩れ落ちる兵士」について調べる過程を、あるいはそれが挫折する過程を述べ、最終的にキャパとスペイン兵それぞれの物語 (Erzählung) に至る、それを「発見」から「発明」への詩学の実践として提示するというユニークな講義録である。ここで発明される物語においては、アンドレ・マルローやアーネスト・ヘミングウェイのような戦争におけるマッチョな物語は拒否され、³³ やはりプライベートな心情的領域にスポットが当てられる。そこにおいて問題なのは——当時の研究水準あるいは資料環境の問題で、この写真そのものがでっ上げである可能性についてほとんど調べられていないという問題は措くとして——、ほとんど何の情報もないス

³³ Härtling, Peter: Der spanische Soldat oder Finden und Erfinden. Frankfurter Poetik-Vorlesungen. Darmstadt & Neuwied (Luchterhand) 1984, S. 62.

ペイン兵が、苦勞して結婚にこぎつけた妻を戦場で夢に見る男、実直で、素朴で、政治的理想ではなく、ただ生活感情のみを行動原理とする男という、いささか陳腐なモチーフに収斂してしまう点である。

ヘルトリングは戦争と文学のテーマを縦軸に、ヨーロッパの文学史を神から英雄へ、英雄から個人へというパースペクティブの限定化の流れとしてたどり、物語を共有する土台が世界から失われていると指摘する。この時代の文学は「終わりの時代の文学 (Endzeit-Literatur)」と呼ばれ、「新しい美学、新しい文学」が求められているのだという。³⁴ 彼は自身の物語がこれに当たるかどうか述べていない。しかし確かなのは、彼の物語が時代的な危機から逃れるべく、物語世界との「同一化 (Identifikation)」を可能にするプライベートな圏域の構築を目指していることである。物語は、明確に目的論的な方向性を持つのである。

こうした物語は、あくまで「同一化」を問題とするがゆえに、親密圏が徹底して理解可能な、ときにはほとんど陳腐さすら感じられる単純さに帰着する。ヘルダーリンの場合で言えば、その物語は彼の日常にも潜んでいたであろう狂気の問題、理解を超えた領域の問題については、ほとんど扱うことができない。また「発明」される物語において家族愛の比重がきわめて大きい点、とりわけ母性への強い執着、それゆえ伝統的な家族観を無批判に踏襲する傾向も指摘されるべきだろう。

しかしヘルトリングの歴史へのアプローチは、たとえばユルゲン・ハーバーマスの『公共圏の構造転換』で示したような、親密圏が重要な役割を果たす文芸的公共性の概念を下支えする部分がある。つまり市民的公共性を親密圏から発想するドイツの社会思想を考える際にも、ヘルトリングは興味深い例を提供しているようにも思われる。またさらに、過去の「心理史的記憶 (psychohistorische Anamnese)」³⁵を回復し、その日常性に民主主義の基盤を示唆しようとするヘルトリングの物語は、21世紀にいたって新しい意味を獲得しつつあるようにも思われる。というのも、戦後ドイツにおいて当事者世代が高齢化し、戦争の記憶をどのように継承していくのかが問題となるなかで、家族の記憶を共同的な文化的記憶にしていくプロセスが重要になりつつあるからである。³⁶ それゆえヘルトリングが追求した歴史と物語、記憶をめぐる問題、また家族愛や家族観の問題は、今後社会的な問題としても表れてくると考えられる。そうしたなかで、ヘルトリングの作品もさらに読み直していく必要があるだろう。

[本論文は、日本独文学会春季研究発表会 (2022年 5月 8日、立教大学)における研究発表「『父の不在』の不在——ペーター・ヘルトリング『ヘルダーリン』の伝記批判的方法」を基にしている。またJSPS科研費21K19988の助成を受けた研究成果である]

³⁴ Ebd., S. 51. ヘルトリングはその可能性を示す例として、クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』、トーマス・ベルンハルト『破滅者』、ペーター・ヴァイス『抵抗の美学』を挙げている。

³⁵ Zit. aus: Michel, S. 201.

³⁶ アライダ・アスマン『想起の文化 忘却から対話へ』安川晴基訳、岩波書店、2019年、31-58頁参照。